

楽游原

楽游原（らくゆうげん）キャスト全集と関連図を画像つきで詳しく紹介



ロマンス(c)Beijing Qishuo Film Co., Ltd

中国ドラマ「楽游原（らくゆうげん）」のあらすじ全話を1話から最終回までまとめました（完結済み）。ネタバレと感想も交え40話の結末までご紹介します。タイトルの漢字は「楽遊原」と間違えやすいですが正しくは「楽游原」です。

ストーリーは、相対する皇帝の孫と將軍の娘が頭脳戦を繰り広げながらも惹かれ合っていく大型ロマンス時代劇。主演はトップスターの許凱（シュー・カイ）と景甜（ジン・ティエン）が務めます。

楽游原 | 1話のあらすじネタバレ

国境を守っている第17皇孫（皇帝の17番目の孫）の李嶷（シュー・カイ）のもとに急報が飛び込んできました。

孫靖がクーデターを起こし、皇族のほとんどを皆殺しにしたというのです。幸いにも李嶷の父 梁王は生きのびたものの、孫靖に人質に取られてしまったとのこと。

そのことを知った李嶷は父を救出するため首都に戻ろうとしますが、その前にまずは李嶷が率いている鎮西軍の兵糧不足をどうにかせねば兵士が飢えてしまいます。

そこで李嶷は、孫靖に兵糧を供給している皮四郎という男から兵糧を奪うことにしました。皮四郎の滞在している妓楼へ向かうと、同じく皮四郎を狙っているらしい崔家軍の何校尉と鉢合わせ戦闘になります。

李嶷と何校尉はお互いの正体を知らぬまま戦いますが、李嶷は何校尉が崔家の人間だと見抜きました。

その後、李嶷は皮四郎を捕らえることに成功するも、皮四郎は兵糧の受け渡しに必要な令牌を崔家軍に盗まれていました。ちょうどその頃、崔家軍はその令牌を使い郭直將軍から兵糧を入手することに成功します。

「楽游原」の相関図

ネタバレ無しの人物相関図

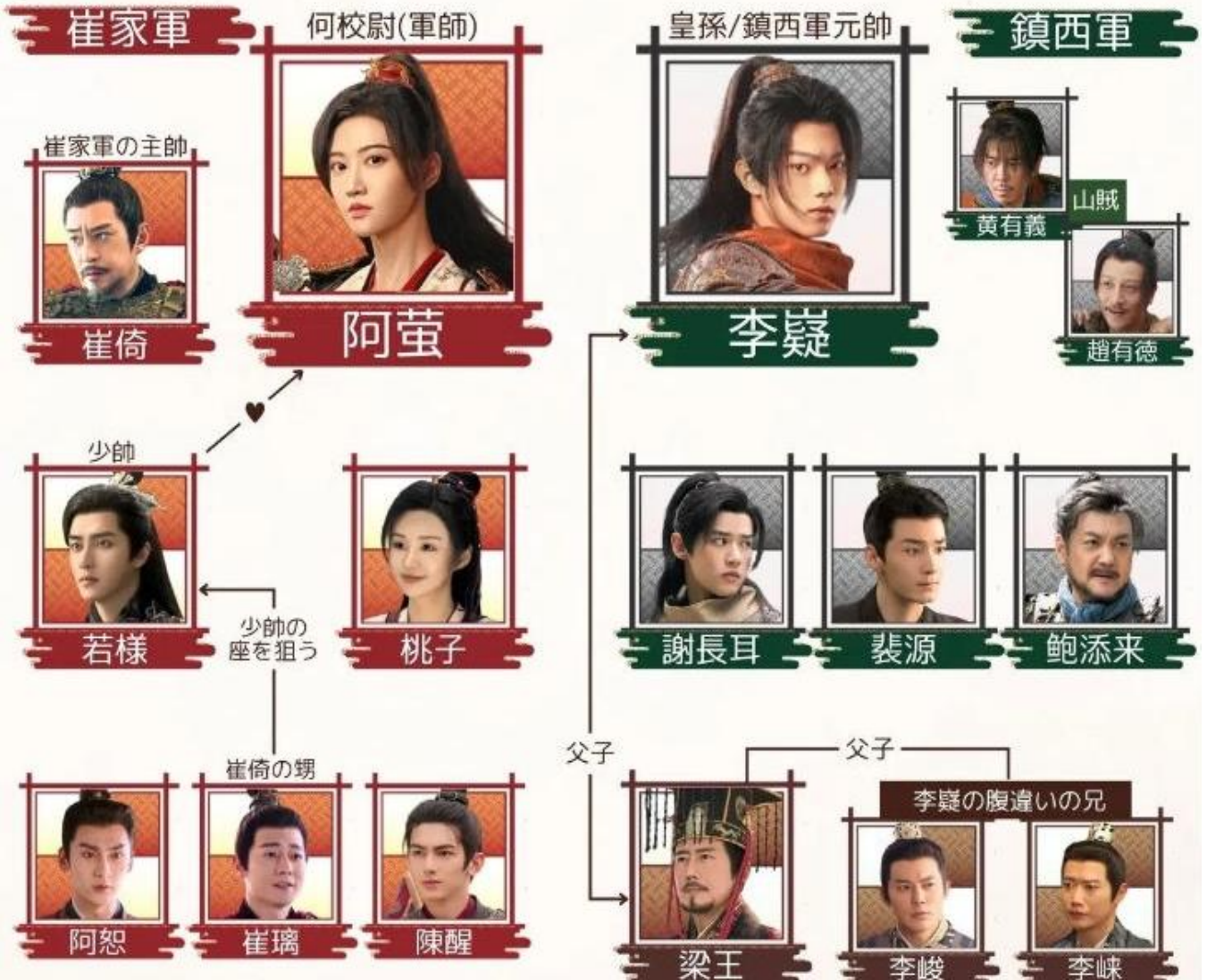
楽游原

崔家軍 鎮西軍 その他

人物相関図



一目惚れ♥



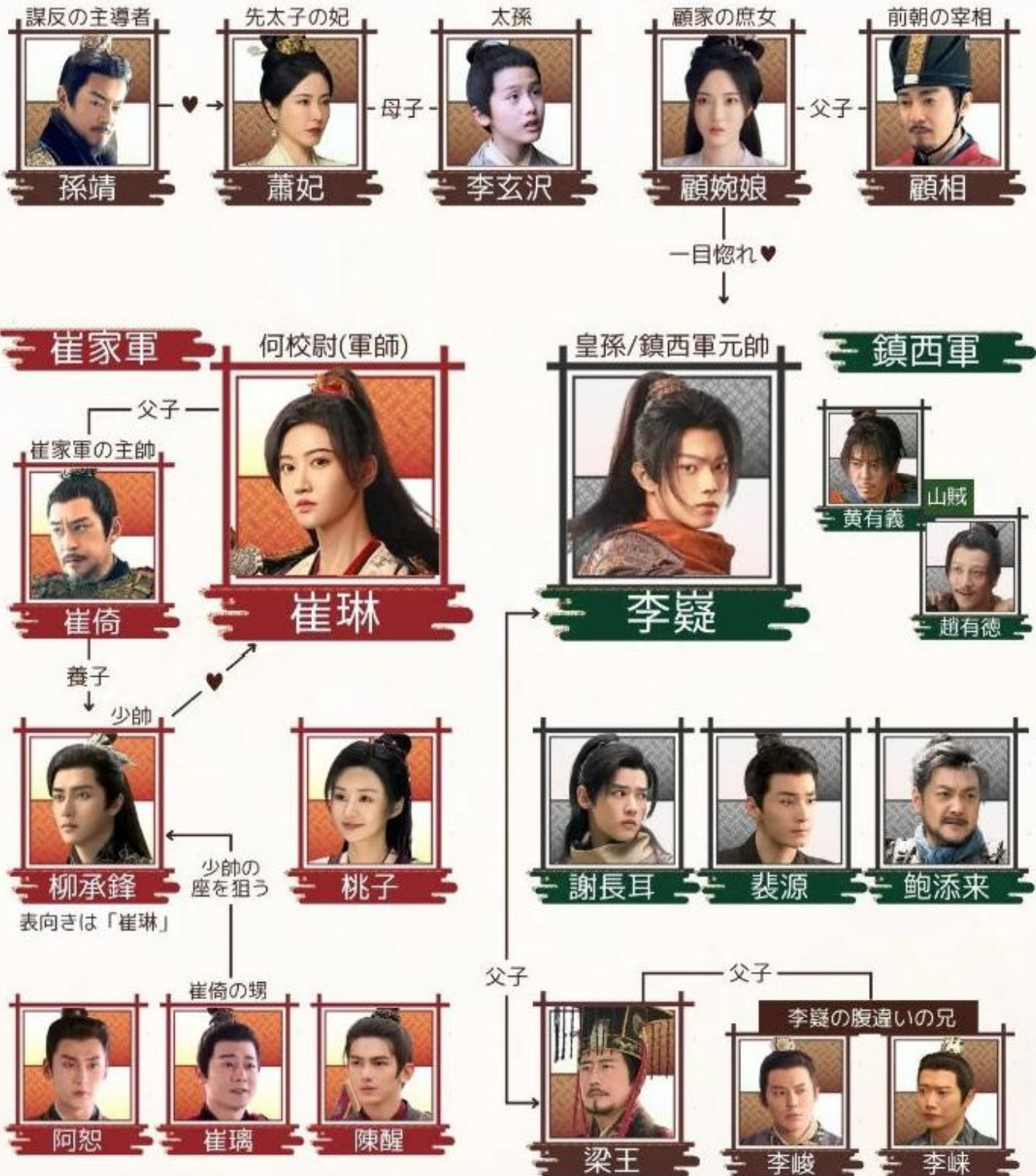
「楽游原」の相関図

ネタバレ有りの人物相関図

楽游原

崔家軍 鎮西軍 その他

人物相関図



楽游原 | 2話のあらすじネタバレ

クーデターを起こし大都督を自称する孫靖のもとに、郭直將軍の領地と兵糧が奪われたとの知らせが届きました。激怒した孫靖は李疑の父である梁王に怒りをぶつけます。

一方の李疑と何校尉はそれぞれ、孫靖の配下である郭直將軍と和議の交渉をすべく郭直の駐屯地へ赴きました。李疑は裴將軍と名乗り、何校尉は男のフリをし、お互い本当の身分を隠したまま交渉に臨みます。

話し合いの結果、郭直の配下のひとりと「旗取り」の勝負をして勝ったほうが郭直と交渉できることになりました。もしも郭直の配下が勝てば、郭直が李疑らに好きなことを要求できるということで話はまとまりません。

旗取りが始まると、李疑と何校尉の配下がそれぞれ勝負に参加しました。その結果、郭直の配下が勝利するも、勝利の瞬間に何校尉の配下が郭直の配下を誤って死なせてしまいます。

そんなアクシデントがありながらも、勝った郭直は李疑と何校尉に、何を要求するか一晩考えたいから今夜は駐屯地に泊まるようにと言いました。

その夜、郭直將軍は2人を始末するべく、食べ物に毒を盛るよう配下に命じます。ところが火事が発生し、騒ぎになった隙に李疑と何校尉は駐屯地から逃げ出しました。

逃げる途中、何校尉は追いかけてきた李疑をうまくやり込めたものの、その先にあった落とし穴に落ちてしまいます。落とし穴に李疑がやって来て、助ける代わりに兵糧を渡すよう取引を持ちかけました。するとそこへ山賊がやって来て……。

楽游原 | 3話のあらすじネタバレ

李疑と何校尉は山賊に捕らえられ、山賊のアジトで拘束されました。しかし、山賊のひとりが李疑の顔見知りだったため李疑だけが拘束を解かれます。拘束されたままの何校尉は山賊と李疑の会話から、李疑の本当の正体が皇孫だと気づくのでした。

李疑は愛する人だと嘘をついて何校尉のことも解放させると、山賊たちは気を遣って李疑と何校尉を2人きりにさせます。そこへ、何校尉を探しに来た桃子と、李疑を探しに来た謝長耳がそれぞれやって来ました。

そしてその直後、郭直の軍隊が向かっているとの知らせが入ると、桃子と謝長耳は山賊と行動を共にすることにし、李疑と何校尉は並州へ戻ることにします。

李疑と何校尉は並州に戻る道中、小屋のような場所で休んでいると老夫婦が休息しにやって来ました。そして翌朝、郭直の配下に小屋を包囲されてしまいます。

老夫婦は李疑と何校尉を床下に隠れさせますが、郭直の配下が老夫婦を追及し始めました。李疑は老夫婦を助けるため床下から出ようとするも何校尉に止められてしまいます。老夫婦は殺され、李疑は「君が止めなければ老夫婦を助けられたかもしれない」と腹を立て何校尉とケンカ別れするのでした。



望州城にいる鎮西軍将軍 裴源のもとに、敵軍の郭直が向かってきているとの知らせが入ります。相手が10倍の兵だと知った裴源は防衛しきれないと判断し望州城から撤退しました。

一方、何校尉とケンカ別れした李疑は、城門で兵士に絡まれている何校尉を見かけて助けます。そして、宿屋までついていくと、何校尉が突然倒れてしまいました。どうやら、負傷した足の傷口からの感染が原因で発熱して倒れてしまったようです。

李疑は亡き母の夢を見てうなされる何校尉を世話し、ケガの治療もしてあげました。目覚めた何校尉は幼い頃に死亡した母のことを語り涙を流します。

翌日、望州城を郭直に奪われたとの情報を知った李疑は、水陸の要の地であり兵糧の運搬や行軍で必ず通る地でもある並州と建州を占領することにしました。そして、何校尉に協力を頼みます。

並州と建州は韓立が支配しているため、韓立の虎符を手に入れることができれば領地も奪えるはずでした。

その頃、山賊たちとともに郭直の軍から逃げている桃子や謝長耳たちは、崔家軍の少帥（若君）に合流します。



李嶷と何校尉は並州城主の韓立の屋敷に潜入し、虎符を手に入れようとしたものの嚴重な警備のせいで入手できませんでした。

そこで、崔家の人間として韓立に接触し「建州路を通らせてほしい」と相談してみることにします。しかしまずはその前に、李嶷と何校尉は以下のような契約を交わしました。

「韓立を先に捕らえたほうが並州を所有でき、虎符を手に入れた側が建州を所有する。韓立も虎符も手に入れた場合は、並州と建州の両方を所有できる」

契約に同意した2人は韓府に赴き、計画どおり崔家の人間として韓立に接触します。李嶷を崔家の若君だと思い込んだ韓立は歓迎しました。

そんな中、韓立のもとに孫靖から大量の贈り物と精鋭隊が送られてきます。名目上は韓立を守るための精鋭隊ですが、真の目的は監視と脅迫のためだろうと悟った韓立は腹を立てました。そして、韓立はなぜか急に李嶷と何校尉を監禁したのです。

嚴重に警備された部屋で軟禁された李嶷と何校尉は、屋根の瓦の隙間から監視されていることに気づきました。李嶷は監視の目を誤魔化すため、何校尉と一緒に入浴するのです。

その頃、鎮西軍の裴源らは望州城を奪還し返していました。撤退したように見せかけ罌を仕掛けていたのです。

一方の宮中では蕭妃（先太子の妃/孫靖の想い人）が、先太子の子を妊娠している姜氏を逃がそうとしていました。



崔家軍の使いが韓府にやって来て何校尉を解放するように言いました。そこへ孫靖の使者もやって来ます。

韓立は使者を歓迎する宴を開き、李嶷と何校尉を一時的に解放して宴に参加させました。

李嶷は宴の席で剣舞を披露すると見せかけて孫靖の使者を殺害します。

実は李嶷は韓立から事前に使者を殺すよう頼まれており、殺害に成功すれば何校尉を解放すると言われていたのです。ただ、李嶷だけは引き続き韓府にとどまることになっていました。

約束どおり解放されることとなった何校尉は去り際に、母の形見である大切な簪を李嶷に渡します。そしてその後、崔家軍と合流した何校尉は若様や桃子に、李嶷がいかに有能な人物であるかを語るのです。

若様は今後の計画について、並州と建州を占領するつもりであることを何校尉に話します。何校尉は鎮西軍と手を組むことを提案しました。

その頃、崔家からの手紙が届き、崔家軍の若君だと思っていた李嶷が別人だと知った韓立は李嶷を牢に閉じ込めます。牢の外では同盟を結んだ鎮西軍と崔家軍が並州に攻め込もうとしていました。

宮中では蕭妃が、孫靖の正妻である魏国夫人と火花を散らしていました。しかしそれは、先太子の子を身ごもっている姜氏を逃がすための計画の一環でした。



同盟を結んだ鎮西軍と崔家軍が並州に攻め込むと、並州城主の韓立は逃亡しました。鎮西軍と崔家軍がそれぞれ韓立の行方を追う中、韓立は前朝の宰相・顧相の娘である顧婉娘を人質にとろうとします。そこへ、李嶷がやって来て顧婉娘を救い出し、李嶷の配下が韓立を捕らえました。

韓立を捕らえた軍が並州を所有するという最初の取り決め通り、並州は鎮西軍の所有地となります。鎮西軍と崔家軍の配下が兵糧のことで口論になる中、若様は李嶷の髪に何校尉の大切な簪が挿してあることに気づきました。何校尉を想い続けてきた若様は嫉妬心から、李嶷に“自分と何校尉は一緒に育った特別な仲だ”と言って牽制するのです。

先ほど李嶷に救われた顧婉娘が李嶷に感謝を伝えに来ました。顧婉娘は鎮西軍に兵糧を寄付することを申し出ます。続けて、首都に戻りたいけど国が混乱状態にある今は一人で戻るか不安だから李嶷の軍隊に随行させて欲しいとお願いしました。

七夕の日。李嶷は何校尉を七夕祭りに誘い、楽しい時間を過ごしました。謝長耳と桃子も七夕祭りに出かけます。



七夕祭りで韓立の処刑が行われると、処刑の直前に韓立の配下たちが救出しに来ます。実は処刑はブラフで、虎符を所持している韓立の配下をおびき出すための李嶷の策略でした。

鎮西軍は狙いどおり韓立の配下から虎符をゲットしたものの、いつの間にか崔家軍に虎符を盗まれてしまいます。

顧婉娘は七夕祭りの際に、李嶷が腕の装備品を欲しがっているところを目撃しました。顧婉娘はそれを購入し、李嶷の部屋に置きました。

ところが、何校尉からの贈り物だと思い込んだ李嶷は、さっそく腕に装着して何校尉に見せに行き「これをくれた人は私をととても大切に想ってくれているようだ」と嬉しそうに言います。

すると、何校尉は自分は若様の妻だと言い出し、今後は軽率な言動を控えてほしいと言ってこの場を去りました。李嶷はショックのあまり、その後の崔家軍との話し合いの場で不利な条件に同意してしまいます。

宮中では先太子の血筋を守りたい蕭妃が、先太子の子を身ごもっている姜氏を逃がす手筈を整えました。ところが、宮中を出ようとした姜氏は孫靖の配下に殺されてしまいます。



次は瀋陽（2つの首都のうちのひとつ）を占拠しようと考えている李疑のもとに、ちょうど瀋陽の刺史・符元児が訪ねてきました。

符元児は鎮西軍の兵糧不足を指摘し「もしも鎮西軍が崔家軍と戦って勝てば兵糧を提供する」と言い、鎮西軍と崔家軍を戦わせようとしています。

李疑はその提案に乗ったフリをし、崔家軍と談合して戦うフリをしました。その最中、仮面をつけて戦う“崔家軍の若様”と対峙した李疑はその仮面を外すと、若様ではなく何校尉でした。

李疑は 何校尉が過去の戦でも「若様」のふりをして戦ってきたのだろうと気づき、また、若様の妻だと言っていたのも嘘だと気づきます。

一方、鎮西軍が崔家軍に勝利したと報告を受けた符元児は、約束どおり鎮西軍に兵糧を届けることにしましたが、兵糧の中に兵士を潜ませました。

そのことを見抜いた李疑は、兵糧を運ぶ部隊を待ち伏せして奇襲をかけ、兵糧の中に潜んでいた兵士たちを捕らえます。捕らえた中には、孫靖の義弟である鄭国公もいました。

一方で孫靖は、崔倚（崔琳の父/崔家軍主帥）がいる營州に兵を送り込みました。そうすれば、崔家軍は崔倚を救いに行こうとして瀋陽から撤退するだろうと読んだのです。

孫靖の目論見どおり、崔家軍は崔倚を救うため營州へ向かうことにしますが、そのためには鎮西軍が占拠している望州を通らねばなりません。

そこで、何校尉は李疑に勝負を持ちかけ「もしも私が勝ったら望州を通らせてほしい。逆に私が負ければ梁王を救うために力を貸す」と言いました。

その勝負は10秒間 目を開けてはならないというものでしたが、李疑は頬にキスをされたため目を開けて負けてしまいます。

その後、鎮西軍と崔家軍が共同して瀋陽を攻め落とすと、符元児は自害しました。



鎮西軍と崔家軍は同じ駐屯地に滞在しており、李嶷と何校尉は今まで以上に親密になっていました。そんな2人の様子を目にした若様は嫉妬心から、崔家軍の駐屯地を別の場所に移すことにします。そんな中、崔家軍少帥の座を狙う崔璃は鎮西軍の裴源将軍に接触し、「崔家軍の若様を殺す代わりに、瀋陽城が欲しい」と取引を持ちかけました。

このことを裴源から聞いた李嶷は何校尉に手紙で知らせます。

営州への出発前、何校尉は李嶷に会いに行きましたが突然雨が降ってきたため雨宿りをしました。

李嶷は生母が自分を生んですぐに亡くなったことや、異母兄2人と父親から疎まれて育ったことを何校尉に語ります。

雨がやむと、李嶷は営州へ出発する何校尉を見送りました。

宮中では魏国夫人が蕭妃の居所に乗り込みます。

魏国夫人は弟の鄭国公が捕まったのは蕭妃のせいだと言いがかりをつけて蕭妃を絞め殺そうとしました。しかし、孫靖がやって来たため蕭妃は助かります。



李嶷と別れた何校尉は崔璃に捕らわれそうになるも、危ないところで崔家軍の若様が駆けつけます。若様は何度も仲間を陥れようとした崔璃を軍法に照らして罰すると言い、崔璃から軍事力を取り上げました。

軍事力を失った崔璃は、李嶷と敵対している李嶷の兄2人なら力を借してくれるかもしれないと考えます。

若様は何校尉と2人きりになると、自分が駆けつけていなかったら危なかったかもしれないと怒りました。そして「君は何よりも大切な存在だ」と言って何校尉への想いを伝えます。しかし何校尉は自分は兄として大切に思っていると答え、その言葉に若様はショックを受けるのでした。

鎮西軍は首都から近い峒関を攻め落としました。すると孫靖の使者がやって来て、3日以内に撤退しなければ梁王の命はないと脅します。

そのことを知った顧婉娘は李嶷に、自分が梁王を救いに行く申し出ました。しかし、李嶷はすでに梁王を救う手配をしたと言い、顧婉娘の申し出を断ります。実は李嶷は宮中の蕭妃にひそかに協力を仰いでいたのです。



崔家軍主帥の崔倚が病気になったとの知らせを受けた何校尉たちは、急いで崔倚のいる嘗州へ向かいました。ところがその道中、李疑の兄たちから兵を借りた崔璃が奇襲を仕掛けます。

何校尉たちが絶体絶命になったところに、李疑が現れ何校尉たちを助けました。李疑は重傷を負った何校尉を連れ帰り治療を受けさせます。

宮中では孫靖が梁王を呼び出し、梁王の3人の息子のうち2人はすぐに撤退したのに李疑だけが撤退していないことを責め立て、李疑から届いた手紙を梁王に見せました。その手紙には「梁王を殺してくれたら感謝する」と書かれており、それを読んだ梁王は怒りのあまり泡を吹いて倒れてしまいます。

危篤になった梁王のもとに乗り込んできた魏国夫人は、「お前の息子が弟（鄭国公）を殺した!」と怒りをぶちまけながら梁王を絞め殺しました。梁王の死を知った孫靖は、梁王の遺体を処分するよう配下に命じます。

しかし実は梁王は死んでおらず、梁王を宮中から助け出すための李疑の作戦でした。梁王は埋葬されそうになったところを救出され、李疑のもとに運ばれます。しかし、目覚めた梁王は手紙の内容（父を殺したら感謝する）を根に持っており、李疑に怒り散らすのでした。



いよいよ首都の西長京（孫靖が立てこもっている場所）を攻め落とすことにした李嶷でしたが、難攻不落の西長京をどのようにして攻め落とすか頭を悩ませていました。それを聞いた何校尉は打破する考えがあると言い、李嶷と一緒に西長京に潜入することにします。

何校尉は若様にも潜入のことを話しましたが、若様は何校尉が危険な目にあうのを心配して猛反対しました。しかし何校尉は、もしも西長京を占拠し孫靖を捕らえることができれば、営州（崔倚のいる場所）に送られた孫靖の兵を撤退させられるはずだと言い、西長京に行く決意を変えませんでした。

西長京に父親の顧相がいる顧婉娘も同行することとなり、西長京に到着した顧婉娘は顧相と李嶷が会えるよう手筈を整えます。

その頃、李嶷の異母兄である李峻と李岷は、次々と都市を占領している李嶷の偉業を妬ましく思っていました。そこで2人は、父の梁王を皇帝の座に就けようと目論見ます。そうすれば、自分たちも権力を得られると考えたのです。



顧相は孫靖の配下に監視されていましたが、監視の目をかいくぐって李嶷と密会することに成功します。李嶷は西長京を奪還するつもりであることを顧相に伝え、そのためには役人の協力が必要だと言いました。顧相は「秘密裏に手配しよう」と請け負います。

街では梁王が即位したとの布告が広まっていた。それを知った孫靖は、死んだはずの梁王が生きていたことに憤ります。そして孫靖は、街じゅうに梁王即位の布告が広まっているのは西長京を混乱に陥れるための敵の策略だろうと読み、広めた者を捜索して捕らえるよう命じました。

捜索の手は李嶷と何校尉が滞在している宿にまで及び、李嶷と何校尉は花嫁行列に紛れて西長京から脱出します。

その頃、崔家軍の若様は孫靖に手紙を送り取引を持ちかけていました。取引の内容は「孫靖に力を貸す代わりに、営州を包囲している孫靖軍を撤退させて欲しい」というものでした。

孫靖は鎮西軍が防衛している峒関を攻め落とすのを手伝ってくれたら営州の軍を撤退させるという条件で同意し、孫靖軍と崔家軍は峒関を共同で攻撃しました。

それにより敗退した鎮西軍は移動の途中、西長京から戻ってきた李嶷一行と遭遇します。

崔家軍が裏切って峒関を攻撃してきたこと、そしてその戦いで多くの仲間が死亡したことを聞いた李嶷は何校尉に「私を西長京に連れ出したのはこの計画のためだったのか」と言って何校尉を疑います。何校尉は否定してこの場を立ち去ろうとしますが、李嶷は何校尉に剣を突きつけるのでした。



李疑が何校尉に剣を向けると、それを皮切りに鎮西軍と崔家軍は争い始めました。李疑は何校尉に剣を向けたまま「今すぐ崔家軍を連れてここを去れ」と言い、何校尉は立ち去ります。

その後、若様に会った何校尉は、鎮西軍を裏切って峒関を売り渡したことを責め立てます。若様は営州を包囲している孫靖の軍を撤退させ崔倚を救うためにしたことだと反論しました。

何校尉は崔倚を救うにしてもこんなやり方は不道德だと非難しますが、若様も言い分を譲らず口論になってしまいます。

その頃、崔璃は李疑の兄たちから指示を受け、再び崔家軍の若様の命を狙おうとしていました。崔璃は軍を率い、営州に向かう若様一行に奇襲をかけます。

崔璃の動きを事前に掴んでいた李疑は崔家軍の若様たちを助けないことに決め、離れた場所から奇襲の様子を伺っていましたが、何校尉が危険な状態だと見るとひそかに助けます。そんな中、若様は殺されそうになった何校尉を身を挺して守り、後ろの川に落ちてしまいました。それを見た若様の側近も川に飛び込みます。

直後に李疑と鎮西軍が駆けつけると何校尉は、助けずにただ見ていたのかと怒りを露にしました。李疑は何校尉を自分たちの駐屯地へ連れ帰り崔倚に手紙を送ります。手紙の内容は何校尉が鎮西軍のもとにいることと、西長京を占領するために力を貸して欲しいという内容でした。

何校尉は若様が亡くなったことを悲しみます。そこへ李疑がやって来て、峒関の件で何校尉を疑ってしまったことを謝罪します。しかし、何校尉は謝罪を受け入れませんでした。



何校尉は幼い頃から共に育った若様が亡くなってしまったことを悲しんでいました。そこへ、李疑がやって来ると何校尉は、若様を救わずにただ見ているだけだった李疑に怒りをぶつけます。

そして、自分の想い人は若様であり李疑のことは好きではないと嘘をついて李疑を突き放しました。しかし、李疑は自分が何校尉を思う気持ちは変わらないと言い、何校尉の体を気遣います。

その後も李疑は何校尉のことを気遣い続け、二度と疑わないことを誓いました。しかし、半ば軟禁状態にある何校尉はここに閉じ込めないで欲しいと不満を言います。李疑は解放することはできないと答え、何校尉はどうにかしてここから出られるよう策を練ることにしました。

そんな中、梁王は3人の息子たちに王の称号を与え、李疑に西長京の奪還を命じました。



李嶷に軟禁されている何校尉はどうか逃げようと考えます。そこで、李嶷との食事の席で腕の装備品をプレゼントしました。李嶷は喜んで装着しますが、何校尉があらかじめ装備品に仕込んでいた薬によって眠らされます。

何校尉は眠った李嶷にキスをして去りました。ところが翌朝、何校尉が船に乗り込むと船頭がなぜか李嶷だったのです！

李嶷に連れ戻された何校尉は、李嶷がだいぶ前から自分の本当の正体（崔倚の娘・崔琳）に気づいていたことを知り驚きます。それと同時に、だから自分を軟禁していたのか（自分を使って父を脅迫するため）と納得しました。

その頃、軍を率いた崔倚は樂陽を攻め落とし、梁王と李嶷の兄2人を捕らえていました。そして崔倚は梁王たちを人質に取り、崔琳を返すよう李嶷に要求します。

李嶷は崔琳を翌日解放することにしましたが、崔琳を手放してしまえば今度はいつ会えるか分からないと思い、最後のデートをします。

崔琳と一緒に「楽游原」にやって来た李嶷は、今後について、正当な皇位継承者である太孫を見つけ出して太孫を皇太子にするつもりだと話しました。そして、平和な世の中になったら駆け落ちしようと言います。

話が崔家軍の若様（柳承鋒）のことになると、崔琳は柳承鋒との関係性や、なぜ自分が「阿蚩/何校尉」として生きることとなったのかを以下のように説明しました。

若様こと柳承鋒は幼い頃に自分を助けてくれた。柳承鋒は両親を亡くしていたため崔倚の養子となった。母は若い頃健康状態が悪くずっと子供ができなかった。すると朝廷は父に息子がいないという理由で別の妻を与えようとした。母は何とか崔琳を身籠ることができたが朝廷には「息子」だと嘘をつくしかなかった。そのため崔琳は男として育てられたが、7~8歳になると女性的な外見を隠せなくなったため柳承鋒が「崔琳」として生きることとなり、自分は「阿蚩」として崔家軍の軍師になった。

その頃、川に落ちて死亡したと思われた柳承鋒は、側近の阿恕に助けられ一命をとりとめていました。



李疑は崔倚の駐屯地に崔琳（何校尉）を送り届けました。

崔倚はふと、李疑の髪に崔琳の母の形見の簪が挿してあることに気づきます。崔倚はなぜその簪を持っているのかと尋ねました。李疑は崔琳にもらったと答えた後、西長京を奪還するために力を貸してほしいと伝えます。しかし、崔倚は李疑を拘束して箱の中に閉じ込めます。崔琳は崔倚に、李疑がいかにか有能かを語り、彼こそが統治者にふさわしいと賞賛しました。それを聞いた崔倚は、箱に閉じ込めていた李疑を解放し、西長京の奪還に協力することを決めるのでした。その頃、意識を取り戻した若様こと柳承鋒は、崔家軍の軍隊の足跡を辿って崔家軍の駐屯地にたどり着きました。ところが、李疑と崔琳が別れを惜しんで見つめ合っているのが見えてしまい、柳承鋒は中に入るのをやめてしまいます。

李疑は駐屯地を去る直前、崔琳のほうを振り返り「平和な世になったら結婚しよう」と求婚しました。それを見た柳承鋒は吐血し、崔家軍に戻らないことを決めます。柳承鋒の側近・阿恕は崔家軍に戻るべきだと説得しますが、柳承鋒は自分の居場所ももうないと感じていました。

——自分はいったい誰なのか。崔琳として生きてきたけど崔琳ではない、何者でもない自分。長年「崔琳」の影として生きてきたのに、崔琳は今、影をまったく必要としていない。ならば自分はどう生きればいいのか。捨てられた影はどう生きていけばいいのか。病弱な自分は戦で戦うこともできない。こんな弱い自分はいっそ死んだ方がいい。柳承鋒は阿恕に自分を殺して欲しいと頼みました。すると阿恕は、どんな病人でも飲めば健康体になり寿命が延びるといわれている「掲碩」の神薬を探すと言いました。しかし、「掲碩」は崔家の宿敵であり崔琳の母親を殺した仇でもあるため、柳承鋒は掲碩に力を借りるわけにはいきません。

それでも阿恕は、掲碩の神薬で健康になり生きてさえいれば、いつか崔琳は柳承鋒の深い愛情に気づくはずだと言って柳承鋒を説得します。それを聞いて柳承鋒は、健康になって戦で戦えるようになれば、きっと崔琳は私を好きになってくれるはずだと希望を抱きます。柳承鋒は何かにつけつかれたかのように「きっと彼女は私を好きになる」と何度も呟くのでした。手を組んだ鎮西軍と崔家軍はそれぞれ、西長京を攻め落とす準備に取り掛かりました。宮中では蕭妃が、出陣する孫靖に口づけをして見送ります。しかし実は蕭妃は口紅に毒を仕込んでおり、孫靖は戦の最中に吐血して倒れます。



李嶷たちは西長京を攻め落とすことに成功したものの、孫靖を取り逃してしまいます。（孫靖は峒関に逃げ延びた）

孫靖を殺すために口紅に毒を仕込み孫靖にキスをした蕭妃は自身も毒に侵されていましたが、治療の甲斐あって目覚めます。蕭妃は李嶷が勝利したことに安堵しつつも、孫靖を愛していたため涙を流します。その後、回復した蕭妃は皇宮を離れ 静かな場所で暮らし始めました。

西長京入りした梁王は名実ともに皇帝となり、李嶷に褒美は何がいいかと尋ねます。李嶷は褒美はいらないがその代わりに、前太子の嫡子である太孫を探して太孫を正式な後継者にしてほしいと頼みました。皇帝は検討するとだけ答えます。

西長京の奪還に貢献し朝廷に復帰した顧相は 李嶷こそが皇太子にふさわしいと考えていましたが、李嶷は長子でも嫡子でもありません。そこで顧相は、李嶷の生母を皇后に追封するよう進言することにします。（そうすれば、李嶷が皇太子の資格を得られるため）

ところが皇帝は、李嶷の生母ではなく、李峻と李暎（李嶷の兄）の亡き母親を皇后に追封すると言うのです。それを聞いた李嶷は、皇帝を怒らせる発言をしてしまい謹慎を言い渡されます。

その頃、柳承鋒（若様）は生き倒れていました。そこへ何者かが近づきます。



顧婉娘は禁足中の李嶷のもとを訪れ、李嶷の生母の姿を刺繍した掛け軸を贈りました。

その頃、峒関で目覚めた孫靖は太孫を生け捕るよう命じます。

鎮西軍の裴源將軍は兵を率いて長州へ行くよう皇帝（梁王）に命じられましたが、名声を得たい李峻（梁王の長子）が裴源の代わりに鎮西軍を率いて出陣しようとしています。

そのことを裴源から聞いた李嶷は、李峻が出陣すれば勝利できないだけでなく多くの兵馬を失うに違いないと判断し、李峻の出陣を阻止することにしました。

そこで李嶷はまず、皇帝に反省の手紙を送り生母の称号を妥協する旨を伝えます。結果的に兄たちの亡き母親が皇后に追封され、皇后の追悼式が行われることとなります。追悼式を主宰できるのは皇后の息子のみであるため李峻は出席せねばならず、結果的に李峻は長州に出陣できなくなるのでした。

長州へは裴源のみが出陣することになりましたが、3割の兵と物質しか与えられなかったため戦で窮地に陥ってしまいます。裴源は援軍要請をしましたが、李峻は援軍を拒否すべきだと言い皇帝はその進言を聞き入れました。

李嶷は自分が助けに行きたくても謹慎中の身であるため、崔琳（何校尉）に助けを求めます。すると崔倚が軍を率いて長州に駆けつけ長州を占領しました。

長州を崔倚に奪われたことを知った皇帝は、李嶷に長州の奪還を命じます。



李嶷は長州を奪還するよう命じられたもののその命令を聞かず、体調不良を理由に居所で引きこもっていました。

皇帝（梁王）の次男である李峽が李嶷を説得しに行き、すでに鎮西軍の指揮権を李嶷に返すよう皇帝を説得したことを伝えると、李嶷はようやく出兵を決意します。

その頃、柳承鋒（若様）は完全復活していました。実はすでに掲碩（崔家の宿敵）と接触し、飲めばどんな病人でも健康体になれるという神薬を飲んでいたのでした。ただその代償として、崔家軍の防衛図を渡すよう要求されていました。また、定期的に延命薬を飲み続けなければ骨や肉が壊死してしまう状態にあります。

そんな中、崔琳（何校尉）は長州の街で柳承鋒の姿を見かけて後を追いました。しかしこれは、崔琳をおびき出して拉致するための柳承鋒の罠で、崔琳は黒服の男達に捕らえられそうになってしまいます。桃子が駆けつけたことで事なきを得たものの、男達は毒の使い手であり崔琳は毒に侵されてしまいました。

崔琳が毒に侵されたことを知った李嶷は急いで長州にいる崔琳のもとを訪れます。ところが、崔倚に見つかり水牢に入れられてしまいました。

李嶷は崔琳の助けを借りて牢から脱出したものの、結局また崔倚に見つかってしまいます。崔倚は李嶷に、崔琳を愛しているなら崔家に婿入りするよう言いますが、李嶷はそれはできないと断りました。



柳承鋒は崔璃に毒を飲ませ言いなりにさせます。そして、柳承鋒は崔倚の前で、崔璃に捕まったフリをしました。それを見た崔倚は芝居だと気づかず、柳承鋒を人質に取っている崔璃に矢を放ち崔璃を死なせるのでした。

崔家軍に戻った柳承鋒に崔倚は、これからは「崔琳」ではなく「柳承鋒」として生きようと言い、柳承鋒が実の息子でなく養子であることを周囲に公表するつもりだと言いました。柳承鋒は自分を見捨てるのですかと言いますが、崔倚は「たとえ柳承鋒に戻ったとしても自分の息子であることには変わりはない」と言うのでした。

その後、柳承鋒は毒入りの薬を崔倚に飲ませます。そして、柳承鋒は李嶷にその罪を着せ李嶷を殺そうとしました。すると、崔琳が柳承鋒に剣を突きつけ李嶷を逃がします。

柳承鋒は崔倚の意向だとして崔琳との結婚準備を進めようとしませんが、崔琳は父の意向だとは信じず、柳承鋒が自分と結婚するために父に毒を盛ったのだらうと気づいていました。柳承鋒は大人しく結婚すれば崔倚の命は無事だと言うのでした。

崔琳が強制的に花嫁衣装を着せられる中、柳承鋒は崔倚にも結婚式を見せたいからと、意識不明の崔倚を連れてこさせます。そして、柳承鋒は崔倚の耳元で「あなたは一度も彼女との結婚を同意してくれなかった。だから自分でこうして解決するしかなかった。そして今、崔家軍は私のものになりました」と囁きました。すると、崔倚が目を覚まし……。



毒で意識不明だったはずの崔倚が突然目を覚ましました。実は、李疑と桃子がこっそり崔倚の毒を調べ解毒していたのです。

崔倚は柳承鋒を捕らえるよう命じましたが、柳承鋒も配下たちに崔倚を捕らえるように命じて戦闘になります。そこへ、李疑と崔琳が駆けつけ崔倚に加勢しました。

崔倚は戦いの最中、柳承鋒の兵が“崔家の宿敵である揭碩人”であることに気づきます。柳承鋒はあなたは私を本当の息子だと思ったことはなく崔琳のために私を利用してきただけ、だから崔家と揭碩の争いは自分には関係ないと開き直りました。

それを聞いた崔倚は柳承鋒はもう自分の息子ではないと言い、崔琳こそが自分のひとり娘だと公表します。

柳承鋒が撤退しようすると、崔倚は逃がすまいとしました。しかし、崔琳は鎮西軍が外を包囲していることを知っていたので柳承鋒を行かせます。しかし、鎮西軍は揭碩人の毒に苦戦し柳承鋒を捕らえることはできませんでした。

李疑は崔倚に領土の交換を申し出ました。崔倚は同意し、長州を他の州と交換することに決まります。そして李疑は、崔琳と共に峒関に行って孫靖を倒すつもりであることを伝えました。

その頃、皇太孫である李玄澤は孫靖の配下に捕まり孫靖のもとに連れて行かれます。その情報を知った皇帝（梁王）は、李玄澤を取り戻し孫靖を倒すべく李疑に出兵を命じました。



李疑たちは秘密の通路を使って峒関に侵入し、中から城門を開け味方の軍を引き入れます。そして、峒関を制圧した李疑は孫靖に降伏を迫りますが、孫靖は皇太孫の李玄澤を人質に取りました。

李疑は自分が死ぬ代わりに李玄澤の命を助けてほしいと交渉し、孫靖は同意します。しかしそこへ、崔琳（何校尉）が偽者の李玄澤を連れて現れ、この者こそが本物の李玄澤だと主張したのです。

それを聞いた兵士たちは一斉に孫靖のいる城内に攻め入ります。戦闘になる中、李玄澤は韓將軍に救われました。

包囲された孫靖はその場で自害し、孫靖のクーデターによって引き起こされた混乱は静まりました。しかし、李疑は崔琳が李玄澤の身を危険にさらしたことが許せませんでした。

腹を立てる李疑に崔琳は、李玄澤はきっと韓將軍に救われたのだろうと推測を述べます。李疑は「そうとは言い切れない」と言い、怒りが収まりません。

その後もギクシャクしたままの2人を仲直りさせたい謝長耳と桃子は、あれこれと画策するも李疑に感付かれて失敗に終わります。

そんな中、李疑を殺そうと企む柳承鋒（若様）は李疑をおびき出すため崔琳に毒を盛りました。そうすれば、李疑を動揺させることができ隙が生まれると考えたのです。

崔琳は中毒症状に侵され、桃子は李疑に助けを求めるも、李疑はどうせまた桃子たちが何か企んでいるのだろうと取り合いませんでした。

柳承鋒は李疑がやって来ないと分かると崔琳に解毒薬を飲ませます。

その後、李疑は本当に病気かもしれないと思い崔琳に会いに行きました。李疑は崔琳に、李玄澤を見つけて後継者にするつもりだと話し、それが済んだら一緒になろうと伝えます。

しかし崔琳は、李玄澤はまだ子供で、もしも将来凡人に成長したら国を治められないし、李疑の兄ふたりが李玄澤をまっとうに補佐するとも思えない、李疑こそが後継者にふさわしいと考えを述べ、2人の意見がすれ違ってしまいます。



崔琳と意見がすれ違ったまま別れた李疑は、帰ってからも気落ちしていました。そんな中、顧婉娘が李疑の乳母を連れて来ると、李疑は乳母との再会を喜びます。

その頃、皇帝（梁王）は崔倚への褒美に何を与えるべきか頭を悩ませていました。すると皇帝の次男 李峽が、崔琳を自分の妻として迎えることを提案し、皇帝もそれに同意します。

これに対して崔琳は、結婚する皇子は自分に選ばせて欲しいと皇帝に願い出しました。

皇帝は自由に皇子を選ぼうなど傲慢だと腹を立てたものの、臣下たちから「崔家と婚姻関係を結ぶことができれば、兵をひとりも犠牲にすることなく崔家の軍力を掌握できる」と説得されます。

その後、崔琳は「楽游原」に李疑を呼び出しました。李疑は率直に、自分に嫁ぐ気はあるかと崔琳に尋ねます。

崔琳はもちろんそうしたいと答え、平民でも皇子でもただ李疑が好きなのだとした上で、李疑が皇太子になるべきだと訴えました。

しかし、李玄澤こそが正当な後継者だと考えている李疑は崔琳の考えに同意できませんでした。2人の会話はまたしても平行線となり、李疑は1人で立ち去ります。その頃、謝長耳は桃子に告白していました。

皇帝の長男である李峻の邸宅で火事が発生し 正妻が死亡しました。李疑と李峽はそれぞれ、意図的な放火ではないかと疑います。



李嶷を訪ねた顧婉娘は、仏壇に線香をあげる際、わざと李嶷の母親の姿絵を燃やしました。姿絵の刺繍には「金糸」が使われており、顧婉娘は金糸や金箔は燃えやすいことを李嶷に教えます。

それを聞いた李嶷は、李峻の邸宅で起きた火事も「金糸」が絡んでいることを突き止めました。使用人らの証言から、李峻が事件当日に妻とその使用人に薬を飲ませて眠らせたこと、火事を加速させるために金の絹を妻の部屋に大量に置いたことも突き止めます。

李嶷はこれらの事実を皇帝（梁王）の前で明らかにすると、皇帝は李峻を禁足処分にしました。

その後、再び李嶷を呼び出した崔琳は「あなたは私と東宮（皇太子の居処）を両方得るか 両方失うかの選択肢しかない」と言います。しかし、李嶷は皇太子の座や王位に就くつもりはないと答えました。崔琳が立ち去ろうとすると、李嶷は彼女を引き止めキスをしました。

柳承鋒は崔琳を拉致しました。そして、薬で力が入らない状態にした崔琳に結婚を迫ります。崔琳はたとえ李嶷がいなくてもあなたとは結婚するつもりはないと拒絶しました。

一方、崔琳がいなくなったことを知った李嶷は柳承鋒の犯行だと見抜きます。そして、拉致されている場所が、「掲碩」が干渉できる北部であろうことも突き止めました。



崔家軍がここへ向かっているとの報告を受けた柳承鋒（若様）は、崔琳（何校尉）を連れて逃げ出します。その道中、柳承鋒の一行を待ち伏せていた李嶷は奇襲をかけ、崔琳を救い出しました。柳承鋒は崔琳を取り戻そうとしますが 仲間に気絶させられ、仲間に抱えられながら撤退します。

目覚めた崔琳は、李嶷の姿を見て安堵しました。李嶷と崔琳はひとときの間、幸せな時間を過ごします。

翌日、李嶷は崔倚のもとに崔琳を送り届けました。李嶷が去った後、白水関が掲碩に奪われたとの急報が飛び込み、崔倚は白水関に向かいます。

その知らせを受けた皇帝（梁王）は李嶷を呼び出し、崔倚が白水関で戦っている間に、崔倚が所有している瀋陽を攻め落とすよう命じました。李嶷が断ると、皇帝は李嶷から鎮西軍の指揮権を取り上げます。

そんな中、崔琳は皇帝に会うため西長京にやって来ました。李嶷はこの機会に崔琳に会うよう配下から促されますが会いに行こうとしませんでした。



前例がないという理由で、崔琳は皇帝に謁見することを許されずにいました。そこで、李嶷は過去60年分の記録を調べ尽くして「前例」を見つけ出し、崔琳が皇帝に謁見できるよう手回しします。

そのおかげで謁見が叶った崔琳は皇帝に、樂陽を返還すると申し出ました。皇帝は大変喜び、崔琳をもてなすための宴を開きます。宴は皇后が主催し、李峽と李嶷、顧婉娘も出席しました。

余興の「玉取り」ゲームが始まると、李嶷は自ら参加すると言い、李嶷と顧婉娘、崔琳と李峽のチームに分かれて競うことに。玉取りの最中、崔琳はみんなの見えないところで李嶷にキスをすると、李嶷は負けてしまいました。

その後、李嶷が宴を抜け出し、それを見た崔琳は李嶷を追いかけたものの、李嶷は大勢の人がいる前でキスされたことを怒っているようでした。

宴が終わると、崔琳は李峽から明日会おうと誘われます。しかし崔琳は当日、その約束をすっぽかしました。そんな崔琳のもとに李嶷がやってくると、崔琳は今日一日だけお互いの身分を忘れて過ごしたいと言い、2人は楽しい時間を過ごすのでした。



李峽のもとを訪ねた柳承鋒は李嶷を殺すべきだと進言します。

崔倚は掲碩との戦いに勝利し白水関を奪還しました。その知らせが朝廷に届くと、皇帝は恩赦として李峻の禁足処分を解くことにします。

そして、その場で崔倚からの上奏文が読み上げられました。その内容は李嶷を皇太子に推薦するというもので、顧相もそれに同意します。皇帝は激怒し退朝を命じました。

李峻は重病のフリをして皇帝の同情を買うと、皇帝はただちに李峻の禁足処分を解くよう命じます。

そんな中、李嶷の乳母が突然死してしまいました。実は李峻が李嶷を殺そうと、乳母が李嶷のために作った料理に毒を盛るよう配下に命じたのですが、李嶷が食べる前に乳母が試食したため亡くなってしまったのです。

そのことを突き止めた李嶷は李峻の屋敷に乗り込み、李峻を殺そうと斬りかかるも裴源に止められます。



李峽は密会した柳承鋒に、皇太子になるのを手伝ってくれるなら掲碩にいくつかの領地を与えると約束しました。

顧相と裴献將軍は、李峻が李嶷を殺そうとした事実を皇帝の前で明らかにし、李峻を流刑にするべきだと進言します。しかし皇帝は、実際には李峻は李嶷を殺していないのだからケンカのようなものだとし、李峻の罪を軽くしようとしました。

すると、顧相と裴献將軍は流刑にしないのなら辞職すると言い出し、皇帝は泣く泣く流刑に同意します。ただし、流刑は故皇后の命日の祭祀が終わってからということで話が決まります。

祭祀の当日、皇帝一行は陵墓へと出発し、鎮西軍も李嶷の乗る輿の護衛として同行しました。しかしこの日は李嶷の乳母の出棺日であるため、李嶷は陵墓行きの輿には乗っておらず、謝長耳と2人だけで乳母の棺を運んでいました。

するとその道中、李嶷は掲碩人に襲われてしまいます。なんとか返り討ちにした李嶷は謝長耳に裴源への伝言を頼み、自身は陵墓へと急ぎます。

その頃、皇帝一行も掲碩人の奇襲に遭っていました。大混乱の中、李峽は皇帝に譲位を迫ると李峻がやってきます。李峽は李峻に反乱の罪を着せ、李峻を刺し殺しました。

鎮西軍も必死に掲碩人と戦う中、李嶷が駆けつけます。しかし、李嶷は李峽に謀反の罪を着せられ刺されてしまいました。鎮西軍の仲間は次々と死亡し、老鮑も李嶷を守って亡くなります。



李峽は李嶷を殺そうとしました。その時、駆けつけた崔倚が弓矢を放ち、李峽はその矢に喉を搔っ切られて死亡します。崔倚のほかにも、崔琳（何校尉）や謝長耳や裴源が到着しました。

重傷を負った李嶷は崔琳に助けられるも、鎮西軍の仲間を失った悲しみで吐血してしまいます。謝長耳も自分がもっと早くに到着していたらと自分を責めました。

翌朝、李嶷は回復しきっていない体で亡くなった仲間を弔います。そこへ崔琳がやって来て、李嶷の気持ちに寄り添いました。

皇帝は不調で寝込んでいましたが、太医は心の問題だろうと診断しました。診断に居合わせた顧相は、また命を狙われるのではないかと不安に駆られている皇帝を安心させた後、李嶷を皇太子にすべきだと進言します。そして顧相は、崔琳を皇太子妃にする必要はないと言い、皇帝はそれに賛同するのです。



蕭妃のもとを訪ねた李嶷は、李玄澤を皇太子にするよう皇帝を説得すると約束したのにできなかったことを申し訳なさそうにします。

すると、蕭妃は「李玄澤はまだ幼く、能力もない」と言い、皇太子になれるのは李嶷しかいないと思っているようでした。

少しすると、韓將軍が李玄澤を連れてやって来ます。蕭妃は李玄澤との再会を涙ながらに喜びました。

李嶷はようやく皇太子になる決意を固めます。李玄澤はまだ幼く、彼がれっきとした統治者になるまでには少なくとも10年はかかり、その間に皇帝がまともに国を治められるとは思えないため自分が皇太子になるしかないと腹をくくったのです。

立太子の儀式が行われ、李嶷は戴冠して正式な皇太子となりました。

皇后は皇帝に、今や絶大な兵力を持つ崔家の娘（崔琳）を皇太子妃にするのは危険だと言い、崔琳の代わりに顧婉娘を皇太子妃として勧めます。

皇帝は同意し、朝議の場で皇太子妃には顧婉娘がふさわしいと発表しました。一人の大臣が崔琳の名前を出すと、他の大臣は一斉に崔琳は皇太子妃にふさわしくないと唱えます。

その頃、掲碩の兵を全滅させた柳承鋒は掲碩に戻れずにいました。側近の阿恕は「定期的に掲碩の薬を飲まなければあなたは死んでしまう。掲碩に戻る方法を考えなくては」と心配します。しかし、柳承鋒はそれよりも、李嶷と崔琳の結婚をどうにかして阻止しようと考えていました。



朝議の場に連れてこられた捕虜の掲碩人は、自分たちは崔倚と手を組んだとウソを言って崔倚を陥れようとします。李嶷はそんなはずはないと言って崔倚を擁護しますが、柳承鋒までもが証人として連れてこられました。柳承鋒は、崔倚と掲碩人が結託したと言い張り、皇帝もそれを信じます。

その日の夜、何者かが大理寺を襲撃し多くの死亡者が出てしまいました。皇帝は、崔倚が証拠や証人を消すために刺客を送り込んだのだらうと考えます。また、ひとりの大臣が、崔倚の娘である崔琳もこの件に関与しているのではないかと言い出しました。

すると李嶷は、崔琳は自分と一緒にいたから関与していないと言い、また、彼女以外を皇太子妃にするつもりはないと断言します。

激怒した皇帝は崔倚を連れてくるよう李嶷に命じ、それができなければ崔琳を殺すとまで言うのでした。仕方なく同意した李嶷は崔倚を迎えに行きますが、李嶷が不在の間に皇帝が勝手に顧婉娘を李嶷の妻にしました。

そんな中、顧婉娘は自殺騒ぎを起こしますが、李嶷はただ体を休めるようにとだけ言って顧婉娘のもとを去るのでした。

その後 李嶷は崔倚の無実を訴えるため、大雨であるにもかかわらず外で跪き続けます。



李疑は跪いて崔倚の無実を訴え続けていましたが、吐血して倒れてしまいました。

回復した李疑は崔琳に会いに行き、崔琳を皇太子妃として娶ることを皇帝が許可してくれたことを伝えます。ただし条件として、崔家軍を解散させる必要がありました。

それを聞いた崔琳は「皇帝や大臣が崔家軍を脅威に感じているのなら、軍を縮小させても構わない。でも解散はできない」と言い、そんな条件なら結婚しないと言うのでした。

しかし、崔家軍主帥である崔倚は崔琳のために崔家軍を解散させることを決意します。そして、崔家軍が解散すると崔倚は一気に白髪になってしまい、正気を失ったかのような状態になってしまいました。

そんな中、李疑と崔琳の婚儀が行われ、崔琳は皇太子妃となります。しかし初夜、李疑と崔琳は剣を向けあい別々に眠るのでした。



李嶷は崔倚に会いに行きました。心が病んでしまった崔倚は李嶷のことを覚えていませんでしたが、妻を亡くした悲しみや後悔を李嶷に語ります。

李嶷は数日の観察から、崔倚の病の原因が妻の死にあるのではないかと考え、崔倚の治療法を探ることにしました。

そんな中、崔琳は柳承鋒が獄中で死亡したことを知りますが、実は生きているのではないかと疑います。そして実際、柳李嶷は生きており崔琳を奪い返そうとしていました。

顧相から顧婉娘を蔑ろにしていることを指摘された李嶷は顧婉娘に会いに行きました。そして、李嶷は顧婉娘に感謝を示しつつも、崔琳以外の女性を妻にする気はないと言い、もし崔琳がいなくても顧婉娘には何の感情も抱かないとまで言い切ります。

ただ、顧婉娘の尊厳のためにここで暮らすことを許可し時々は訪問すると約束します。そして、顧婉娘に好きな人ができたらここを出られるよう手配するとも約束しました。

顧婉娘は泣きながら「私が好きなのはあなただけ」と言いますが李嶷は、顧婉娘が得られるのは形だけの側室の称号だけだと念を押して立ち去ります。



顧婉娘の居処から帰ってきた李嶷は崔琳に会いに行きました。崔琳は李嶷を追い返そうとし、李嶷は居座ろうとして2人はベッドの上でもみ合いになります。李嶷がキスをすると崔琳は抵抗しましたが、最終的には彼を受け入れ本当の意味で2人は初夜を迎えるのでした。

李嶷は崔倚の心の病を治すため、幻覚を見せることができるという慕仙鶴に接触しました。李嶷は美食家の慕仙鶴に、一日一品の美食を三年間提供することを約束すると、慕仙鶴は協力することを了承します。

その頃、柳承鋒は**李嶷を殺す計画**を掲碩人の男と話し合っていました。

顧婉娘の侍女は顧婉娘に、李嶷に媚薬を使うことを提案します。顧婉娘はそんなことをしたら余計に李嶷に疎まれるだけだと言って却下しました。

しかし後日、李嶷がやって来ると侍女は勝手に李嶷の酒に媚薬を盛っていたのです。体の異変を察知した李嶷はすぐにこの場から逃げ去り、その足で崔琳のもとへ駆け込み“熱い一夜”を過ごします。

顧婉娘は顧相に、媚薬の一件以来李嶷が会いに来なくなったこと、これで自分には希望の目がなくなったことを話しました。すると顧相は崔琳を亡き者にしようと考え、顧婉娘も賛同します。

そんな中、李嶷は崔倚を慕仙鶴のところへ連れて行きました。慕仙鶴がお香のようなものをつけると、崔倚は妻の幻覚を見始め……。



妻が殺される幻覚を見た崔倚は吐血して正気を取り戻します。胸に溜まっていた血を排出したことで、病から回復したのです。

その後、蕭妃と李玄澤が暮らしている清雲観に崔倚も住むこととなり、崔倚は李玄澤に武芸を教えたりしながら平穏な日々を送ります。

その頃、顧相は掲碩人の烏延と密会していました。顧相は崔琳（何校尉）を殺してくれたら望むものを何でも与えると交渉すると烏延は快諾します。ただ、柳承鋒（若様）が崔琳を慕っているため、柳承鋒が邪魔をするのではないかと懸念がありました。

そこで、烏延は顧相に、柳承鋒は崔琳を拉致して駆け落ちする計画を立てているから、その計画に乗って崔琳を拉致したあとで殺せばいいと提案します。

一方の柳承鋒は阿恕に自分と同じ「柳」の姓を名乗るよう勧め、そうすれば家族になれると言いました。阿恕は感激した様子で「柳恕」と呟いてみます。

現在、崔家軍の兵は各地で辛い目に遭っており、譚副将軍が崔琳に会いたがっていました。崔琳は桃子と一緒に譚副将軍に会いに行きましたが、実はこれは崔琳を拉致するための柳承鋒の罠で、崔琳と桃子は眠らされて攫われてしまいます。

崔琳の身に何かが起こったことを察知した李疑は、ただちに西長京の門をすべて閉じるよう命じました。

柳承鋒は拉致した崔琳と桃子をひとまず、烏延がいる掲碩の隠れ家に連れて行きました。そして柳承鋒は、桃子をどうするかは烏延に任せると言うので、烏延の配下が桃子を剣で突き刺します。



李疑は兵を動員して崔琳と桃子を捜索します。そんな中、刺された桃子は死体置き場に捨てられます。

宮中では皇帝（梁王）が、門を閉鎖し兵を動員している李疑の動きを知り謀反を起こすのではないかと不安に駆られていました。

一方、柳承鋒は烏延に殺されそうになっていました。なぜ殺すのかと聞かれた烏延は柳承鋒が貪欲だからだと答え、柳承鋒の私欲のせいで多くの精鋭隊が死んだことを責めます。

すると柳承鋒は、もし自分に何かあれば阿恕が、掲碩と顧相が結託していることや掲碩の拠点を李疑に密告する手筈になっていると言いました。

烏延は柳承鋒を縛り上げて拷問にかけ、阿恕の居場所を吐かせようとしています。しかし柳承鋒が口を割らないのを見て、烏延はそれならば崔琳を殺すと言いました。

柳承鋒は崔琳を殺すのなら自分の手でやらせて欲しい、ただし彼女の体を美しいまま残したいと交渉すると、烏延は柳承鋒に体を綺麗に保ったまま死ぬ毒薬を渡しました。

柳承鋒は崔琳を腕に抱きながら「もし来世があるなら少しでも好きになってもらえたら嬉しい」と言い、崔琳に毒薬（たぶん偽物）を飲ませます。外では李疑が捜索中で、それを察した烏延たちは崔琳の体をこの場に残したまま抜け道から撤退しました。

残された柳承鋒は渾身の力で門に体当たりし門を突き破ります。しかしここは上階にあるため、柳承鋒は門を突き破った勢いで落下しました。ちょうど付近を捜索していた李疑が駆け寄ると、柳承鋒は最期の一声を振り絞り崔琳を助けて欲しいと伝えて死亡します。

崔琳を見つけ出した李疑はすぐさま宮中へ連れ帰ったものの、医師たちは崔琳が死亡していると告げるのでした。李疑は深く悲しみます。



謝長耳は死体置き場で桃子を見つけたものの、桃子は瀕死状態でした。診察した医師によれば、桃子は事前に何かしらの薬を服用しておりそのおかげで息があるとのこと。謝長耳はどうか桃子を救ってほしいと懇願しますが、医師は助けられる確率は低いと言うのでした。

李疑に会いに来た阿恕は、顧相が孫靖と結託していたことや、顧相が掲碩とも手を組んだことを話します。そして、すべてを話し終えた阿恕は柳承鋒の遺体を埋葬させてほしいとお願いし、李疑はそれを承諾しました。

その頃、顧相は烏延から事の成り行きを聞き、もしも阿恕が李疑にすべてを密告したら一族が滅亡してしまうかもしれないと危惧します。そこで、顧相は皇帝に会いに行き、李疑を廃太子にして軍権を取り上げるべきだと訴えます。皇帝はすべてを顧相に任せることにしました。

顧相は皇帝を護衛するための私兵を配置します。李疑は崔琳の棺とともに皇帝のもとへ乗り込みました。そして、李疑は顧相が孫靖と結託していたことや、その後は掲碩と手を組み崔家軍を解散に追いやったこと、さらには皇太子妃である崔琳の殺害を企てたことを明らかにしました。

顧相は私兵に李疑への攻撃を命じますが、李疑は顧相の私兵が掲碩人だと暴きます。すると、掲碩人の烏延らは皇帝と皇后を人質に取って逃げようとしてきました。

李疑が隙をついて皇帝と皇后を救い出す中、棺の中で目覚めた崔琳も参戦します。李疑と崔琳は掲碩人を一掃し、逃げようとした顧相も殺害しました。

そうして事態が収束した後、李疑は崔琳が生きていたことを喜びキスをします。



意識を取り戻した桃子は崔琳（何校尉）が無事だったことを知って安堵します。崔琳は桃子に、自分の身に起きたことはとても不思議で長い夢を見ていたようだと言い、目覚めたいのに目覚められず、体の気と血が流れるのを待たねばならなかったと話しました。

それを聞いた桃子は自作した偽死の薬と似ていることに気づき、その薬をかつて柳承鋒（若様）にも渡したことを思い出します。（やはり、柳承鋒は崔琳に偽死の薬を飲ませていたようですね）

皇帝（梁王）は今回の件を通じて、ようやく李疑が親孝行で良い息子であることに気づきました。李疑の有能さにも気づいた皇帝は李疑に譲位することを決め、自身は皇后と2人で山奥でひっそりと暮らすことにします。

皇帝は李疑をコオロギ遊びに誘い、これまでのわだかまりを取っ払って楽しい時間を過ごしました。そして、皇帝は譲位することを伝えます。

即位式が行われ、李疑は皇帝となり崔琳は皇后となりました。顧家一族は追放となり、顧婉娘は平民に落とされます。

崔琳が妊娠すると、李疑はいつか皇帝の座を李玄澤に譲って老蘭関に行こうと崔琳に伝えます。

その頃、謝長耳は桃子にプロポーズし、桃子もそれを受け入れました。

楽游原 | 最終回（40話）の結末

李疑は10年間皇帝を務めたのち、李玄澤に譲位し、崔琳と子供たち（一男一女）とともに老蘭関へ移り住みました。

謝長耳と桃子も老蘭関にやって来ると、みんなで鎮西軍の兄弟分たちの墓にお供えをし子供たちに思い出話を聞かせます。

李疑はその後も家族と老蘭関で暮らし続け、幸せな日々を送るのです。

<完>